



7月に入り、梅雨明けを思わせる暑い日差しが照りつけるかと思うや否や、夕方には一転して黒い雲が湧き起こり空一面を覆いつくす。そしてすぐさま、激しい雷雨とスコールのような激しい雨。梅雨明け前の特徴的な天候と、子供のころ教えられましたが、そろそろ夏の青空を期待してもよいのかもしれませんが、しかし、最近のこの熱帯のスコールを思わせる激しい雨。数十年前の私の子供の頃とは様子が違うような気がします。地球温暖化は毎年毎年、熱帯地域をぐっと北に引き上げているように思われます。

資源高騰をめぐる二つの視点

（短期的な経済的脈絡で捉えてみると・・・）

最近の石油価格高騰には、なにやらやりきれない思いが募ります。基本的には新興国の急激な需要の拡大によるものですが、それを加速した要因もあります。経済成長の後退を防ぐべく金融緩和政策により垂れ流された世界的過剰流動性です。その大量の資金が、魅力を失いつつあるドルや証券市場から逃げ出し、投機的な「物＝資源」に向かってしまっているということです。本来なら、証券市場等を通じて付加価値を生み出す生産活動（企業活動等）に向かい国民所得を増加させる役目を担っているお金が、大挙して資源投機へと走っているのです。

話を製品価値（価格）に進めます。製品価値とは、最終的には消費サイドとの調整を伴いますが、要は供給サイドからみれば、川上（原料）から川下（製品）へと、原料＋付加価値連鎖の累積値です。ところが現在生じていることは、人間が手を加える付加価値累積プロセスの最初の川上の原料（資源）の段階で、価格が高騰し、その後の価値連鎖のプロセスを不当に歪め始めていることです。日本のように資源をもたない国は、物づくりという付加価値連鎖のプロセスのなかで、富を築いてきました。その価値創造の累積値が正當に反映されなくなることは日本経済にとって好ましい状況ではありません。勿論、世界経済にとっても

同じです。

それからもう一つ気になることがあります。この価値連鎖と表裏一体をなす、行為としての労働に対する価値観に関わることです。我々日本人だけではないと思うのですが、物への働きかけ（作業とか行為）それ自体に価値を認めるという暗黙の職業的倫理観が存在します。（最近では希薄になっているといえますが。）特に、日本人には特徴的であり、物の所有より、物づくりへの勤勉な行為自体に価値を見出しているところがあり、これが経済的付加価値形成プロセスと表裏一体になっているところがあります。

冒頭、石油の高騰がなんともやりきれない思いが募ると言いましたが、それは、労働における本来の付加価値創造過程が正しく評価されず、ひいては物づくりの労働に対する職業的倫理観も失われてしまう。そのような変化への（古い人間の）やりきれなさと言ったらよいでしょうか。

（長期的な文明的脈絡で捉えてみると・・・）

人類の文明史をみると、過去からの連続性を断ち切るような激しい変革（ゆらぎ）が、必ずや文明移行期には現れます。個々の文明の栄枯・盛衰はあるものの、文明なるものは、エネルギー資源を森林から石炭、石炭から石油・天然ガスへと、資源の相対的枯渇とともに新たな資源を獲得しつつ、今日の地球文明にまで拡大してきました。最近の過去にない石油資源の高騰は、次なる資源への移行を強く促すための、ある種の文明的なゆらぎのような気もします。

21世紀に入り、石油エネルギーの持つ負の面、いわゆるCO2等の温暖化ガスによる人類生存の危機が世界的に叫ばれ、低炭素社会（文明）の構築が急務となり始めました。今回の洞爺湖サミットでも、「2050年までに温暖化ガスの排出量を50%削減する目標を全世界で共有するよう求める」ことで合意がなされました。なにやら回りくどい宣言ですが、この言い回しからもわかるように50%削減を合意したわけではありません。CO2排出の大きなシェアをもつ振興国を取り込むことは依然できません。国益という壁に阻まれ、多くの国々が具体的目標を設定することが出来ず、その前で足踏みしている状態です。このような状態が長く続くようなら、SF映画ではないですが、人類の知らぬ間に破局が訪れ、取りかえしのつかない状況になっていた、などとなるかも知れません。（あるいは既になっているのかも知れません。）

石油価格の異常な高騰だけでなく、資源全般の高騰も同じ脈絡のなかで捉えてみると、文明からの強いメッセージを感じます。

「時間的余裕はない。人類の存続という地平に立ち返って考え・行動すべし。人類の生き方や考え方の根本的な大転換を図れ！そして新たな代替エネルギーへの転換を可及的速やかに実行せよ！」と。